

燃える紙人形



エンジン

燃える紙人形

作：エンジン

白いノートに鋏を入れ、一体一体丁寧に形を作っていく。

彼女の人形、紙のヒトガタ。

俺に愛を教え、深い絶望の底へ蹴落とした、あまりにも純粹すぎる女。

出来上がった紙人形に、彼女の名前を書き込む。

憎むべき最愛の女性、染川秋（そめかわあき）の名を・・・。

「一期一会」という四字熟語がある。

「運命の赤い糸」という言葉もある。

でも、俺はそんな洒落臭い言葉の羅列なんて、毛頭信じちゃいなかった。大半の諺がそうであるように、また多くの偉人の名言がそうであるように、頭の中に留めておく必要のない、戯言だと思っていた。

・・・あの娘に会ってしまうまでは。

去年の夏、先輩に誘われて、無理矢理合コンというものに参加させられた。

30歳、ロクに女と話せない、小中高と苛められっぱなしだったこの俺が、そんな場に一分たりともいられるはずがない。

でも「とにかく行ってみろよ、でなきゃお前残業だぜ」と先輩によって半強制的に連れ出され、普段だったら近寄りすらしないようなカジュアル系の居酒屋の個室へとやってきた。

どうやって帰ろうか、始まるまではずっとそんなことを考えていた。体調が悪いと言ってみるか、トイレに行くフリしてそのまま逃げ出すか、いずれの方法をとっても後日ロクな結果が待っていないのが目に見えている。

でも、そんな考えも、彼女を一目見てコロリと変わった。連れである二人の女は、いかにも今風といったチャラそうな女で、今までに何人とも付き合ってきたということが見ただけで分かるような、俺みたいな面食いにとっては苦手なタイプだった。

だが、彼女は違った。黒髪のボブカットに、シックな黒い服を着て、それなのに顔には幼さというか、純粹さがあった。おそらく俺より幾つか年下で、顔立ちは決して美人というわけでもないが、木目調フレーム眼鏡越しの細い目が一方では知的さ、メイクなしに潤いを保った小ぶりの唇が憂いを帯びたその表情はどこか弱々しさを思わせるところがあって、その小柄な身体が何とも愛らしい彼女を―出会った瞬間―人生で初めて人を「好き」になってしまったのだ。

合コン中、ギャハハと口やかましく喋る連れ達を余所に、彼女はうつむき加減で会話への参加に消極的だった。勿論、俺もだ。

そんな状況を見かねた先輩が、俺達二人に助け舟を出してくれた。

「山中と橋川さんって、どっちもなんかインドア系だよな。趣味合うんじゃない？」

その言葉に、二人同時に顔を上げて、相手の方を向いた。目が合った瞬間に俺達がやったことは、「よろしくお願いします」とペコリを頭を下げ、挨拶。

最初にやったじゃねえかと先輩にツッコまれたが、そのことがきっかけで俺は染川さんと話げできた。

二人の趣味は共通していた。読書に映画鑑賞、互いに同じジャンルのものを好み、面白いと感じるものも共通していた。いつもは笑顔なんて見せたことないのに、彼女が徐々に微笑み始めるのにつられて、自然と頬が緩んだ。

先輩含め他の男達は彼女のことを全く眼中になかったようだが、それが全く信じられなかった。こんなにも、魅力的な女性がいるのに。

それ以来、俺は休日を利用し、しばしば彼女と出会うようになった。映画館、図書館、美術館に植物園。二人で一緒に、色んなところへ行って、たくさんの素敵な楽しみを共有した。

出かけた後は必ず喫茶店へ行って、色々なことを語り合った。二人のこと、将来のこと、周囲のこと、静かな場所で、二時間も三時間も話した。

彼女はいつも俯いていて、あまり積極的には話しかけてこないけれど、それでも度々俺を気遣ってくれていて、彼女なりに精一杯心を開いてくれていた。

ある時の帰り道、二人で手を繋いで歩いていた時、彼女はこう言ってくれた。

「私、自分を出すのは苦手だから、むすっとしてるとか、機嫌が悪いつて思われてるかもしれないですけど、そんなことはないんです。山中さんと一緒にいる時は、どんな時でも楽しいんです」

その時の彼女の顔は、仄かに紅くなっていた。お互いの気持ちが全て通じ合っているって、心からそう思っていた。

だがその一方で、不思議な感情が芽生え始めた。彼女に対して俺は間違いなく恋心を抱き、そしてそれは遭う回数を重ねる度に強くなっていったのだが、それと同時に「憎しみ」のような想いが生まれたのだ。

あの娘が嫌いだからではなく、むしろ好きだから、だからこそ、もし隠れて俺を裏切っていたら、もし俺を騙そうとしていたら、どれだけ許せないことか、そういう根拠なき妄想から生まれる憎しみが、自身の脳裏を侵食していた。

万が一、裏切られたら――。

不安は日に日に強くなり、そしてそれは現実になってしまった。

ある日のデートの終わり、俺が送った「お疲れさま、今度はどこ行こうか」という内容のメールに対して、いつもならすぐに返してくれるのに、返事は遅れた。二日間、どうしたんだろうと思って待った結果、送られてきた返事は・・・。

「ごめんなさい、やっぱり行けません」

その時は何か別の用事ができたのだらうと思うようにし、何とか不安を抑えようとした。俺がひどいショックを受けたのは、それから更に一週間後、唐突に送られてきた文章だ。

「大変申し訳ありません。今まで私のような人間に付き合っただき、感謝しております。でもこれ以上、貴方に無駄なお時間を遣わせたくありません。だから、もう会わないでおきましょう。本当に、ごめんなさい」

勿論必死で止めようとした。電話をしても出てくれない、留守電に向かってむなしく説得の言葉を投げかけた。

「何故ですか！この前俺に行ってくれたことはウソだったのですか！？ 貴方と過ごす時間が楽しいというのは、口からの出任せだったんですか！」

それから一日経って、彼女から一言だけ返事があった。

「あなたと一緒にいたら、酷いことになるから・・・」

その言葉はあまりにも衝撃的で、決定的だった。そうして俺の初恋は、あまりにも突然の幕引きを迎えたのだ。

それ以来、俺は以前にも増して暗い性格になった。

「なんだよそんな失恋の一つや二つ、気を取り直して明るく行こうや！」

と先輩は言ってくれたが、その数週間後、彼は大きな仕事のミスで俺になすりつけた。元々成績のよくなかった俺は、たちまち会社から追い出されてしまった。

これぐらい、どうってことないだろと言う人がいるかもしれない。

だが、あいにく俺は今までの負け犬人生のおかげで、すっかり臆病になっていた。彼女との出会いで立ち直る希望が見えてきたところに、この無慈悲な運命を次々と叩きつけられて、到底立ち直れなかった。

そして今俺は、家賃1万円のボロアパートに引きこもっている。柵の所々にサラ金の看板が掛けられた、今にもそのまま崩れそうな木造二階建て。他の住人は、何をして生きているのか、そもそも幽霊なんじゃないかと思うぐらい得体の知れない連中ばかり。ネットなんか勿論ないし、ゆっくりできる風呂も自分だけのトイレもない。

一日三匹はゴキブリやゲジゲジを見かけるような汚い四畳半の一室で、絶望に浸りながら一日を過ごしている。

彼女に対して不信感を抱いた自分の邪さ、そして突然自分との関係を絶った彼女、その両方に対する憎しみで、押し潰されそうになる。

最近、日課ができた。ノートの切れ端と鋏を使って出来た紙の人形。これにあの女の名前を書いて、命を吹き込む。

そしてその後、ライターの火を足から近づけて、そのまま燃やす。そうすると、彼女の身体は炎によって瞬く間に黒く変色し、苦しむかのように反り返りながら消し炭となっていく。

明日への希望が見い出せるはずもない。

だが、募りに募った彼女への一元々は愛情であった—その憎しみを晴らす方法は、これしかないのだ。

小学校の頃、ことある度に苛められ、親にも教師にも助けてもらえなかった自分は、こうやって鬱憤を晴らしていた。成長するにつれ、次第にこういったことは恥と思うようになって次第にやらなくなったが、彼女への歪んだ想いが再びこの後ろめたい行為に俺を走らせてしまった。

千切るのも、切り刻むのも駄目だ。燃やして醜い骸へ変化させ苦しめなければ、欲求が満たされない。

だが、一端解消しても、時間がたてば憎悪が再び復活する。

燃やしても、燃やしても、燃やしても――。

一体、二体、三体。作る紙人形の数はいくつ増えていき、苦しみもどんどん強くなる。半月ほど経って、とうとう歯止めが利かなくなった。

興信所に高い金を払い、一週間かけて彼女の家を調べさせた。

もう、耐えられない。

大きなカバンを持って、俺は外へ出た。中身は、タンク一杯のガソリン。タクシーの運転手からは訝しげな顔をされたが、無事彼女の家の前までたどり着いた。

ローカル線の小さな駅から歩いて15分ほどのところにある、粗末な木造のアパート。どこかしら、俺の住んでいる場所と同じ雰囲気でした。

試しにドアノブを回してみると、開いていた。中には誰もいないようだ、そっと足を踏み入れる。

壁などはさすがに経年でぼろぼろになっていたが、俺の部屋よりも丁寧に整理整頓されていた。

部屋に漂う彼女の残り香に惹かれ部屋を覗いた時、ある物を見つけ、驚いた。

テーブルの上には、ライター、鋏、そして見覚えのある形の紙が置かれていた。鋏で人型に形作られた、紙人形。そこに書かれていたのは、まごうことなきこの俺の名。

周辺に散らばった焦げかすを呆然と眺めていると、後ろで扉の閉まる音がした。

振り向くと、彼女が立っていた。

手に持ったビニール袋から、大学ノートが顔を覗かせている。

呆然とした彼女の表情からは、秘密を知られたことに対する衝撃が読み取れた。

「あなたを、燃やしたかった・・・」

心の底を打ち明けるように発した俺のその言葉を最後に、無言のまま長い時間が過ぎた。俺も彼女も、互いを凝視したまま動かない。もはや二人とも、言葉を交わす必要すらなかったのだ。

やがてお互いの意志を理解した二人は、じっと見つめ合ったまま服を脱ぎ、一糸纏わぬ姿になった。

彼女の白い肌、そのなだらかな丘陵がガソリンに染まっていく。ぬめり気ある液体を、彼女は恍惚とした表情で浴びていた。

俺と彼女は、そっと互いをいたわるように抱き合った。それぞれが同じく求め合った、愛と憎しみを燃やし、昇華させるために。

目をつぶり、手に持ったライターを点火した。

二人の身体が、瞬く間に熱くなる。

(完)